

鴨東通信

おうとうつうしん

ていーたいむ

露伴文学へのいざない
井波律子

■私のノートから■

「天道」とは何だったのか
大野出

特別寄稿

増補改訂 西村茂樹全集12巻刊行の意義
尾田幸雄

史料探訪36

「翁」「三番三」「千歳」 狩野永信筆
門脇幸恵

■人文学の最前線■

熊本大学拠点形成研究
世界的文化資源集積と文化資源科学の構築
三澤純

■源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第七回〉■

源氏物語千年紀を終わって
朧谷壽

春



◎新刊案内◎

金瓶梅研究／光芒の大正／漱石と世界文学
日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚
青島の都市形成史:1897-1945／朝鮮近現代史を歩く
増補改訂 西村茂樹全集 第7巻／元三大師御籤本の研究
生命論と靈性文化／祈りの文化／日光東照宮の成立
熊本藩の地域社会と行政／禁裏・公家文庫研究 第三輯
中世史科学叢論／御堂関白記全註釈 長和五年
日本古代都市史研究／藤村庸軒年譜考／茶の医薬史
江月宗玩 欠伸稿訳注 乾

思文閣出版

露伴文学へのいざない

井波 律子（中国文学者）

手付かずの宝箱

幸田露伴といえば明治～昭和にかけて数々の著作を残した文豪です。誰でもここまではご存知でしょう。しかし同時代の夏目漱石や森鷗外などと比べると、あまり読まれていないのではないのでしょうか。それに、難しいとか、お堅い「文豪」といったイメージを持っている人がけっこう多いと思います。

これは研究会の最初にもお話ししたのですが、20年くらい前に露伴を読もうと思って、金沢大学の図書館に『露伴全集』を借りに行ったんです。そうしたら図書カードには何の記入もなかった。要するに誰一人として借りていなかったわけです。その後2、3年たって、たまたま東京・神田の古本屋で『全集』をひと揃い見つけて買ったのですが、それも新品同様でした。どなたがお売りになったのかわかりませんが、最初から最後まで全然開いた形跡がない。

私は彼の作品はまだ開けられていない宝箱のようなものだと思います。だから研究対象としてとても魅力的です。

人間・露伴の魅力

露伴には「二宮尊徳翁」とか「努力論」に見られるように、道徳的修養を主張するようなところもあります。けれども将棋、釣り、料理といろいろなものに熱中したり、若い頃には旅に出て無一文になって帰ってきたりしています。また、モダンなものをどんどん取り入れてもいました。彼が生きたのは、江戸以来の遺風が色濃く残る一方、西欧からいろいろなものが渾然一体となって入ってきた時代だったのです。

彼は幕府に仕える家系の生まれで、明治という新しい時代では「はみ出し者」といった立場でした。それに対する反骨精神はむろんあった。ただ彼の場合「むき出しの反骨」といった野暮くさいものではなくて、モダンなものを拒否するようなことはありませんでした。

この時代、西欧の新しい文化がどっと流入してきて、相対的に中国の地位はぐっと低下していきま
す。そうすると中国に肩入れしたくなる。そんな判官はんがん最良さいりやうなどところもあります。これはきっと自分のおかれた境遇とどこか通じるものを感じたからでしょうね。

露伴にとっつきにくいイメージがある人は、まず次女の幸田文さんの『父・こんなこと』（新潮文庫）などから入るのが良いかもしれませんね。そうすれば露伴の著作にも比較的スムーズに入れるのではないのでしょうか。お堅いイメージとはかけ離れたエピソードがいくつもあります。

初心者ばかりが集まって

私は以前から露伴の作品を読んでいましたし、一度きちんとしたかたちで彼の著作に取り組みたいと思っていました。幸運にも、私が所属していた国際日本文化研究センターには多彩なスタッフが揃っているの
で、幸田露伴という多面的な人をとりあげて、いろいろなところからアプローチしたらおもしろいだろうなあ、と考えて研究会を立ち上げました。その成果が今回出版された『幸田露伴の世界』です。

それにしても今回の研究会の組み立て方は少し冒険的だったと思います。なにしろ露伴を熟読したことのあるメンバーはほとんどいませんでした。ただ、文学を専門にやっている研究者では手を付けられないところに手が届くメンバーを集めたいと思いました。たとえば猪木武徳さんには経済、白幡洋三郎さんには都市論、細川周平さんには音楽という風
にです。そのおかげで、いろいろな分野の方に、それぞれの方法で多角的にアプローチしていただくことができました。

露伴はとてつもなく知識の幅の広い人で、作品も文学、エッセイ、都市論……とほんとうに多彩です。漢学についても、『論語』をはじめとした儒教的なテキストも読めば、道教や神仙思想も好き、蘇東坡そとうぼのこともやるし、近世の『水滸伝』の訳注なんかもやる。民間学者とか偉大なるアマチュアと呼ぶべき

人だったのではないのでしょうか。いわゆるアカデミズムとは距離があったように思います。だからおこがましいようですが、素人が素人と対峙するというスタンスの研究会も良いのではないかと思います。

考えてみれば、露伴のように引き出しの多い博学の人に挑むにあたり、今回のようなメンバーの組み方をしたのが、結果的によかったと思います。そのおかげで彼の文豪としての部分だけでなく、背後にあるすごく大きな知識のプールに少しだけ足を踏み入れることができたのではないかと思います。

研究会をはじめるとすぐ、「読んでみるとなかなかおもしろい」とか、「もっと古くさい人だと思っていたけれど、意外にモダンだ」といった声が聞かれ、露伴に対する固定観念はだんだん崩れていきました。多彩な顔ぶれが揃っただけに、それぞれの発表には個性があり、いつも意外な発見がありました。毎回とても面白かったです。私としては自分の手薄な分野をほかのみなさんに教えてもらったといえますね。

いまこそ露伴を

露伴の文章は「^{いつきかせい}一気呵成」という表現がよく当てはまると思います。プロの著述家としては、推敲しながら書くというよりも、一気に書き上げるタイプなのでしょう。私も彼の文章は黙読しているとわからなくなるときがありますが、そういうときは声に出してみる。そうすると意味はわからなくてもリズムなんかは訴えかけてくる。むしろ音読に適しているのではないかと思います。

膨大な漢学の素養を持っているにもかかわらず、小説などは漢文脈ではなく流暢な和文脈で書かれています。また彼の背後には膨大な知識の蓄積があって、言葉だけが上滑りするようなことは絶対にありません。そういうところが魅力です。

露伴だけでなく夏目漱石、森鷗外といった世代と、それより後の世代とでは、教養の素地が違うと思います。彼らは幼児教育の時点ですでに漢文の素読などをはじめていました。当時は、今の子どもたちが物心ついたときからパソコンやゲームを始めるのと同じ感覚で漢文に親しんでいたのでしょう。

それに対して今の子どもたちは、小さな頃からパソコンをさわって、キーボードの操作が血肉と化している。きっと私が50歳を過ぎて覚えたのとは全然違うと思います。今の時代は教養の質が多様になっているのでしょう。こういう世代が書く日本語は、私たちとは少し違うでしょうね。たぶん頭で考えた



ことを文章にしていく変換の仕方が違います。

でも日本語というのはいまだに漢字とひらがなで組み立てられています。その漢字の意味が全然わからないままに文章を作るというのは、ちょっとしんどいだろうと思います。キーボードをたたけばいろいろなことばは出てくるけれども、やはり字そのものには固有の意味がありその背景には歴史があるのですから、それらを子どものうちから暗黙のうちに知っているのと知らないのとではずいぶん違うでしょうね。今を悪いとは言いませんが、新しいモノが付け加わっていく一方で、何かが少しずつ欠けていっているのは確かでしょう。そういった現代の我々が失いつつあるモノが露伴の文章の中にはいっぱい詰まっていると思います。

今回、露伴をとりあげようと思ったのは、日本語の問題、つまり最近「日本語はこのままでいいのか」とか「日本語は減じるのか」といった問題が注目されつつあるのと、どこかでつながっていたのかもしれない。たとえば、古井由吉さんが夏目漱石の漢詩を一般向けのセミナーでとりあげていたりして（『漱石の漢詩を読む』として岩波書店より刊行）、明治から大正にかけての人の中国あるいは漢学との関わり方といったものに関心を持つ人たちも出てきています。今は私が20年前にはじめて『露伴全集』を借りたときよりは露伴に興味を持っている人が増えているのではないのでしょうか。

いきなり大部な全集からとなると大変でしょうけど、最近はきれいな装丁の文庫本も出ています。だから露伴が世間の目に触れる機会も増えていると思いますよ。みなさんも未知の宝に気づき出したのではないのでしょうか。最初はエッセイでも都市論でも、みなさんが興味を持ったものから読んでみたらいいと思います。まずはこの本が露伴との出会いのきっかけになればいいですね。

(2009.3.9 於：国際日本文化研究センター)

幸田露伴の世界



井波律子・井上章一編

幸田露伴は、明治～昭和を通じ、小説家・劇作家・随筆家などとして多彩な才能を発揮し、すぐれた作品をのこした。本書はさまざまな分野の専門家が、小説や評論はもろん、都市・遊技・旅行・自然観察・人生論などの著作を通じて多様な角度から露伴にアプローチする。

◆露伴を語る◆

幸田露伴——その生涯と中国文学

露伴と川

露伴の都市論を読む

『澁澤榮一傳』をめぐる

露伴の耳

露伴と植村正久——露伴のキリスト教観

「五重塔」という「プロジェクトX」

——前進進『五重塔』と日本の高度成長

『平家』と京都に背をむけて

『努力論』とその時代

露伴の連句評釈

「文人」としての露伴の成立とその背景

国際日本文化研究センター 井波 律子

ドイツ文学者 池内 紀

国際日本文化研究センター 白幡洋三郎

国際日本文化研究センター 猪木 武徳

国際日本文化研究センター 細川 周平

国際日本文化研究センター研究員 平松 隆円

同志社大学 佐伯 順子

国際日本文化研究センター 井上 章一

国際日本文化研究センター 鈴木 貞美

チューラーロンコーン大学 岩井 茂樹

国際日本文化研究センター 劉 建輝

◆露伴を読む◆

『風流佛』を読む

『ひげ男』を読む——明治の「武士道」と戦時体制

幸田露伴略年譜と系図

鈴木 貞美

佐伯 順子

▶A5判・328頁／定価5,250円



ISBN978-4-7842-1444-0

金瓶梅研究

【最新刊】

荒木猛著

佛教大学研究叢書 6

『水滸伝』『西遊記』『三国志演義』とならんで中国四大奇書の一つとされる『金瓶梅』。この作者不詳の小説は明の万暦初年の成立とされ、『水滸伝』中の武松物語を百回に敷衍したものである。これまで淫書と目され禁書扱いであったためか、他の小説と比べて最もその研究が遅れていた。本書では、明代の政治・社会の腐敗を暴露したこの小説を、執筆時代・素材・用語・服装など様々な側面から考察し明らかにする。

【内容目次】

第一部 『金瓶梅詞話』考

『金瓶梅』執筆時代の推定／『金瓶梅』の成立に関する一考察／『金瓶梅』と楊繼盛

第二部 『金瓶梅』の素材と創作手法について

『金瓶梅』の素材／『金瓶梅』の創作方法

第三部 『金瓶梅』に投影された史実

『金瓶梅』に見える明代の用語について／『金瓶梅』第十七回に投影された史実 ほか

第四部 崇禎本『金瓶梅』考

新刻繡像批評『金瓶梅』（内閣文庫本）の出版書肆について ほか

あらき・たけし…1947年富山県生。東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。現在佛教大学教授。

▶A5判・496頁／定価8,925円 ISBN978-4-7842-1442-6

百人一首万華鏡

白幡洋三郎編

百人一首を、歌の解釈はもとより、歴史、選び方、カルタ、翻訳など、さまざまな角度から紹介し、その文明的広がりをもさぐる。それぞれのテーマにそった版本、各種カルタ、翻訳本など、カラー口絵（16頁）収録。

▶B5判・178頁／定価2,520円

ISBN4-7842-1223-X

孝子伝の研究

【2刷】

黒田彰著

佛教大学鷹陵文化叢書⑤

孝思想に発した文学としての孝子伝は、中国の哲学や社会制度とも深く関わり、またわが国における説話文学史に大きな影響を与えてきた。本書は、孝子伝と二十四孝の伝存資料の検討および図像資料の紹介などの実証的研究を盛り込んだ成果。

▶四六判・486頁／定価3,150円

ISBN4-7842-1085-7

未知への模索

毛沢東時代の中国文学

吉田富夫著

佛教大学鷹陵文化叢書⑭

1949年10月の中華人民共和国誕生から文化大革命までの〈毛沢東時代〉の中国文学についてまとめた一書。毛沢東の中国の模索がひとまず挫折したことは、いまや明らかである。では、毛沢東時代とは何であったのか、改めて問い直す。

▶四六判・290頁／定価2,415円

ISBN4-7842-1291-4

光芒の大正

最新刊

—— 川内まごころ文学館蔵 山本實彦関係書簡集 ——

改造社関係資料研究会編

大正デモクラシーの幕開けとともに、時代の寵児となった雑誌『改造』を創刊したのは、鹿児島県出身のジャーナリスト山本實彦であった。山本または改造社宛に届いた書簡のうち、『改造』が最も華々しく光り輝いた大正8年(1919)から昭和5年(1930)までの書簡を詳細な解説とともに活字化。収録書簡132通、差出人82名の内訳は小説家が最も多く、学者、思想家、社会運動家など。

薩摩川内市と鹿児島純心女子大学で結成された「改造社関係資料研究会」(代表：犬塚孝明 鹿児島純心女子大学教授)による共同研究活動の成果。

【主要差出人(収録順)】

秋田雨雀 芥川龍之介 阿部次郎 荒木貞夫 有島武郎 今井邦子 上杉慎吉 宇野千代 岡本かの子
岡本綺堂 大仏次郎 賀川豊彦 賀川ハル 兼弘正雄 上司小剣 河合栄治郎 河井醉茗 川上四郎
岸田劉生 木村泰賢 久保田万太郎 倉田百三 古在由直 胡適 西條八十 堺利彦 佐藤紅緑
里見弴 志賀直哉 島木赤彦 島崎藤村 白鳥省吾 白仁武 高須芳次郎 高浜虚子 谷崎潤一郎
田山花袋 近松秋江 千葉竜雄 寺田寅彦 徳田秋声 徳富猪一郎 豊島与志雄 永井荷風 長岡半太郎
中里介山 中村吉蔵 南部修太郎 西田幾多郎 白南雲 長谷川時雨 濱本浩 原田実 平福百穂
広津和郎 福田徳三 藤森成吉 帆足理一郎 細田民樹 堀口大学 前田河広一郎 正宗白鳥 三浦虎雄
水守亀之助 三宅やす子 武者小路実篤 武藤山治 村松梢風 村松正俊 室生犀星 山川均
与謝野晶子 与謝野寛 吉江喬松 吉田絃二郎 吉野作造 吉屋信子 若山喜志子 若山牧水

▶A5判・290頁／定価5,250円

ISBN978-4-7842-1459-4

漱石と世界文学

【最新刊】

坂元昌樹・田中雄次・西楨偉・福澤清編

「世界文学において漱石をとらえなおす」という視点のもと、夏目漱石が世界文学を意識し、そこから多大な影響を蒙ったことの検証だけでなく、漱石がその後の日本文学を含め世界文学に与えたインパクトや、世界で漱石文学が翻訳のかたちでいかに受容されたのかなどをも見極める9篇。漱石ゆかりの熊本大学の教員を中心とした共同研究の成果。

【内容目次】

I 漱石と東アジア

門前の彷徨 (西楨偉・熊本大学文学部准教授)
自失した者たちのめざめ (蕭幸君・台湾東海大学准教授)
「白雲」と「孤雲」 (屋敷信晴・熊本大学文学部准教授)
韓国における夏目漱石研究の様相 (朴美子・熊本大学文学部教授)
〈浪漫〉をめぐる言説の系譜 (坂元昌樹・熊本大学文学部准教授)

▶四六判・256頁／定価2,940円

II 漱石と欧米、ロシア

存在への根源的な問い (田中雄次・熊本大学名誉教授)
漱石とハーンにおける「超自然性」 (福澤清・熊本大学文学部教授)
フランスにおける漱石の受容について (濱田明・熊本大学文学部准教授)
「恐露病」の想像力 (溝淵園子・熊本大学文学部准教授)

ISBN978-4-7842-1460-0

中国文人画家の近代

豊子愷の西洋美術受容と日本
西楨偉著

中国近代を代表する文人・芸術家、豊子愷(Feng Zi kai, 1898-1975)は、民国期から人民共和国期まで世相人情を反映する抒情漫画や、随筆の名手として身辺雑事から文学・美術・音楽などを題材に軽妙な語り口の散文を遺した。「中国」「日本」「西洋」という三つの視点を設けることにより、豊子愷が日本を通して西洋美術を受容したことの意義を問うと同時に、「文化の越境する」豊子愷の本質に迫り、20世紀日中知的交流の軌跡を検証する。

▶A5判・384頁／定価5,775円 ISBN4-7842-1230-2

関西モダニズム再考

竹村民郎・鈴木貞美編

20世紀初頭の日本では、「東京都市文化圏」と「大阪・京都・神戸都市文化圏」という全く異質の「都市文化圏」の競争的共存が実現した。関西都市文化圏の経済的・社会的・文化的先進性や、地域に根ざした自立的なモダニティの上に花開いた関西モダニズムの諸相をとりあげた14篇。日文研の共同研究の成果。

▶A5判・口絵12頁、本文604頁／定価8,925円

ISBN978-4-7842-1379-5



夏目漱石における東と西

(大手前大学比較文化研究叢書4)

松村昌家編

明治の文豪、夏目漱石の小説において、そこに織り込まれた西洋的概念と東洋的概念の葛藤、直接影響を受けた小説との比較、イギリスの事物の受容の様相など、気鋭の研究者たちによる漱石文学論。

▶A5判・208頁／定価2,940円 ISBN978-4-7842-1335-1

新興俳人の群像 京大俳句の光と影

田島和生著

昭和8年、京大関係者の俳句雑誌として発足した「京大俳句」。花鳥諷詠主義に飽き足りない作家たちも学外から続々と参加し、新興俳句運動の旗頭として注目を浴びた「京大俳句」の盛衰を軸に、新興俳句運動とその時代背景、俳人たちの動静と作品を紹介する。

▶四六判・294頁／定価2,415円

ISBN4-7842-1251-5

日本の朝鮮・台湾支配と 植民地官僚

松田利彦・やまだあつし編

【最新刊】

近代日本の朝鮮・台湾支配を現地で担った「植民地官僚」に着目して、日本の朝鮮・台湾支配を考察する。国際日本文化研究センターでの共同研究の成果。

【内容目次】

I 研究の現状

朝鮮における植民地官僚……………松田利彦・国際日本文化研究センター准教授
台湾植民地官僚制について……………やまだあつし・名古屋市立大学准教授

II 植民地官僚の出自

植民地朝鮮出身者の官界進出……………通堂あゆみ・東京大学大学院
朝鮮総督府官僚守屋栄夫と「文化政治」……………松田利彦

III 植民地官僚と政策形成

書房・義塾参考書の制定過程にみる台湾の植民地的近代教育の形成……………大浜郁子・法政大学兼任講師
朝鮮総督府・鈺務官僚と朝鮮鈺業会……………長沢一恵・奈良大学非常勤講師
朝鮮総督府の土木官僚……………広瀬貞三・福岡大学教授
第二次水力調査と朝鮮総督府官僚の水力認識……………河合和男・奈良産業大学教授
朝鮮総督府の通信官僚とその政策観……………福井讓・仁済大学校専任講師
植民地期朝鮮の神職に関する基礎的研究……………青野正明・桃山学院大学教授

IV 植民地官僚のメンタリティーと政策思想

朝鮮総督府官僚・鈴木穆論……………三谷憲正・佛教大学教授
石塚英蔵総督の台湾統治改革構想……………野口真広・早稲田大学アジア研究機構客員研究員
ノンキャリア技術官僚と植民地台湾……………やまだあつし
思想検事たちの「戦中」と「戦後」……………水野直樹・京都大学人文科学研究所教授

V 「帝国」と植民地官僚

田中義一内閣時の朝鮮総督府官制改定問題と倉富勇三郎……………永井和・京都大学教授
政党内閣期における植民地統治……………李炯植・東京大学外国人研究員
外務省における「外地人」官僚……………李昇燁・京都大学人文科学研究所助教
植民地官僚の台湾振興構想……………河原林直人・名古屋学院大学専任講師
日本支配下の東北アジアにおける地方支配と人の流れ……………浜口裕子・拓殖大学教授
満洲国間島省の官僚構成……………廣岡浄進・大阪大学大学院

▶A5判・756頁／定価13,650円

ISBN978-4-7842-1451-8

青島の都市形成史 :1897-1945

市場経済の形成と展開

欒玉璽著

【最新刊】

青島がドイツ・日本との間に持った経済関係や、その歴史的要因、経済発展の過程や特徴、さらに青島が全中国へ与えた影響を解明。日中両国の広範な資料を用いることにより、詳細かつ中立的・客観的な立場での考察を試みる。

【内容目次】

青島の租借と都市インフラストラクチャー整備／交通機関の整備と商品流通市場の形成／青島近代綿紡績業の設立とその発展／青島の産業発展とその構造／教育・文化施設の整備と近代教育体制の形成／ドイツ・日本の青島進出とその都市形成ほか

▶A5判・364頁／定価7,140円 ISBN978-4-7842-1453-2

朝鮮近現代史を歩く

京都からソウルへ 【最新刊】

太田修著

〔佛教大学鷹陵文化叢書②〕

在日朝鮮人や中国東北地域の朝鮮族も含んだ、朝鮮半島とそれにつながる人々。彼らにとって植民地支配と戦争の歴史とは何であり、どう記憶されているのか、民衆は日常をどう生き、何を思ったのか。歴史とゆかりのある場所を訪れて、人や風景・モノにふれ、史資料を読みまとめた一書。

▶四六判・256頁／定価1,995円 ISBN978-4-7842-1450-1

条約改正交渉史 1887~1894

大石一男著

日英通商航海条約締結までの条約改正交渉を分析し、「対外戦争なしでの近代化は可能であったのか」について新たな見通しを提示する。

▶A5判・356頁／定価6,825円 ISBN978-4-7842-1419-8

●私のノートから●

「天道」とは何だったのか——おみくじと「天道」との深い関わり—— 大野 出

おみくじと「天道」には、実は深い関係がある。そのことは後に述べることにするが、そもそも「天道」とは、どのようなものを指しているのだろうか。

現在、研究者の間でも「天道」に対する認識は、さまざまである。

まず、「てんどう」と読むか「てんとう」と読むか、それだけでも意見は分かれる。

私自身がこれまで史料に当たってきた経験からの現時点での臆断にしか過ぎないが、もともと、その読みは「てんどう」と「てんとう」の二通りが併用されていたと覚しい。そのことは日葡辞書からも窺える。ただ、江戸時代の大半の時期は、ほぼ「てんとう」という読みで統一されていた感がある。そして、後に「てんどう」という読みを取っている人々も増えてきたのではないかと考えている。

そもそも「天道」と言った場合、神・儒・仏・道それぞれの研究者の立場によって、思い描かれる「天道」のイメージは大きく異なっていると思う。

しかし一方、その相違点について論じ合われたことは、これまでは、ほとんど無かったのではないだろうか。

だが、江戸時代の多くの人々にとって「天道」というものは、きわめて重要な概念であった可能性があ

る。神・儒・仏・道の思想家のみならず、ごく一般人々にとっても、「天道」という概念は、各思想の領域を越えた日常的にも重要な概念であったと思われる。少し大袈裟な言い方をすると、「天道」（ないしは「天」という概念は、近世日本の思想世界を貫く言わば背骨のような存在だったのではないかとさえ思える。

さて、冒頭でも述べた「天道」とおみくじとの関係についてである。このことは小著『元三大師御籤本の研究——おみくじを読み解く——』の中でも考察をしたことなのであるが、日本の所謂おみくじの源流と目される元三大師御籤の中で、この「天道」に言及している部分が甚だ多い。これは元三大師御籤の大きな特色でもある。しかし、元三大師御籤は、元三大師の名が冠される以前には観音籤とも称され、また元三大師（良源）自身も如意輪観音の化身とされており、元三大師御籤自体が観音への信仰を基底としている。ところが、元三大師御籤の信仰の対象は、観音よりもむしろ「天道」である場合が多い。

もちろん、元三大師御籤における観音への信仰と「天道」への信仰を単純に比較することはできないのであるが、現代の我々のほとんどが「天道」というものを意識しなくなっているという事実を勘案したとき、かつての日本人が、いかに「天道」というものを

強く意識していたのかということ、元三大師御籤を通して知ることができるのである。

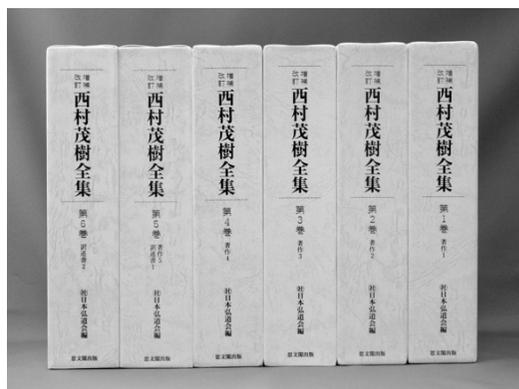
「天道」が武家の権威を担保するものであったことは既に指摘されている。「天道」は武家の言わばアイデンティティーでもあった。こうした語感を、元三大師御籤における「天道」も、おそらくは継承しているであろう。しかし、そうしたものは別のニュアンスが、元三大師御籤では、むしろ強い。元三大師御籤の中の「天道をいのる」といった表現には、天地自然の順当な運行への人々の願い、換言すれば、飢饉をものたらす干魘をはじめとした異常気象や予期せぬ天災への恐れと豊かな実りへとつながる穏やかな四季の移ろいへの願いが込められていたのではないかと今は考えている。

一方で、元三大師御籤には「天道をまつる」という表現もあらわれる。この場合は明らかに何らかの信仰行為が行なわれていたということであろう。このことについては、天道宮あるいは天道社との関係も含めて、今後さらに考察を続けていきたいと思っている。



おおの・いずる

1961年東京生。筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム（倫理学専攻）修了。博士（学術）。現在、愛知県立大学准教授。著書に『日本の近世と老荘思想—林羅山の思想をめぐって—』（ペリカン社）、『江戸占い』（河出書房新社）、『老子の毒子の非常識』（風媒社）など。



Hannelore Eisenhofer-Halm, Nishimura Shigeki und seine Konzeption einer "Neuen" moral in Japan der Meiji-Zeit. ars una Neuried 2002 じゅあろ。

現在、南ドイツの名門チュービンゲン大学で教鞭をとっているハンネローレ・アイゼンホーファー・ハリム教授は、同著『西村茂樹と明治期の日本における「新しい」道徳の構想』において、内外における西村と福沢のこの両者の取り扱いにおける不均衡の理由を、福沢が西欧的な者の考え方の推進者として進歩的な開明派の代表者であるのに対して、西村をその対極にある伝統的な道徳思想を信奉する反動的な守旧派の代表者として一方的に決め付けてきた偏見にあると主張する。

同教授によれば、西村は、儒学を思想的支柱としてきた徳川幕府の瓦解の後の思想的混乱の状況に直面して、それによる道徳の崩壊と国家社会の荒廃を憂慮し、「新しい」道徳の構想を模索し、それを確立するために身を捧げたのであり、それはまた丁度昭和二十年（一九四五）の敗戦を期に我が国の文化と伝統を培ってきた心の支えを失い、未だに「新しい」道徳を模索しつつある今日の我が国において西村の志を学ぶ必要があるというのである。没後百年にして、西村はその志を理解する知己を西欧において得たことになる。

一方、我が国における西村茂樹研究の現状はどうであろうか。『日本弘道会百年史』に掲載されている「西村茂樹研究の主要文献目録」によれば、歴大な研究業績が残されているものの、戦後に限れば、日本弘道会関係者による著作を除いて、多くは西村茂樹という思想家を一方的に頑冥にして固陋な守旧派として批判する傾向が強い。しかし、こうした自説に対する数々の批判や攻撃は、西村にとってむしろ歓迎すべきものであったと思われる。

事実、『日本道徳論』（初版）の冒頭の文章には、「（自説について）疑ハシキ条件アラバ十分ニ質問アランコトヲ、若シ又余ガ言フ所ヲ道理ニ違ヘリト思フ者ハ、之ヲ攻撃スルモ駁論スルモ諸君ノ意ニ任カス」と書かれている。しかし、正しい批判には正しい理解が先立たなくてはならない。西村茂樹百年忌を記念して企画された今回の全集の刊行の意義はここにあるのである。

（お茶の水女子大学名誉教授）

増訂 西村茂樹全集 [全12巻・既刊7冊]

古川哲史監修／（社）日本弘道会編集

昭和51年刊行の『西村茂樹全集』（全3巻）に収録されていた著作・論説の全てを解体し、分野別の内容を整理。旧版未収録の著作・訳述書・論説・日記・書簡・漢詩・和歌・年譜・その他も含めた全ての著作を全12巻で刊行、西村茂樹研究の決定版である。収録する文献ごとの解題を各巻末に付し、付録として月報（執筆者2人）を付す。

第1巻	著作1	定価17,850円	ISBN4-7842-1189-6
第2巻	著作2	定価17,850円	ISBN4-7842-1212-4
第3巻	著作3	定価19,425円	ISBN4-7842-1255-8
第4巻	著作4	定価17,850円	ISBN4-7842-1317-1
第5巻	著作5・訳述書1	定価18,900円	ISBN978-4-7842-1380-1
第6巻	訳述書2	定価18,900円	ISBN978-4-7842-1443-3
第7巻	訳述書3	定価19,950円	ISBN978-4-7842-1461-7

最新刊

第8巻	訳述書4
第9巻	著作6・訳述書5
第10巻	論説1
第11巻	論説2
第12巻	論説3・書簡・詩歌・年譜

▶A5判・各巻平均750頁

増補 改訂 西村茂樹全集12巻刊行の意義

尾田幸雄

西村茂樹は、文政十一年（一八二八）に、下総佐倉藩士の家に生まれ、幼少の頃より儒学・武道に親しみ、やがて蘭学や英学などの洋学を学び、明治六年には、森有礼、西周、加藤弘之、中村正直、福沢諭吉等と共に啓蒙思想普及のための本邦初の学術団体「明六社」を結成、さらに明治九年には道義高揚のため教化団体「東京修身学社」（現在の「日本弘道会」）を設立。また文部省編集課長・局長として教科書の編集、明治天皇の侍講、華族女学校校長をつとめるなど一貫して、道義国家の建設を目指して道徳教育の普及に一身を捧げた。

著作には『日本道徳論』をはじめ、『心学講義』『國家道徳論』『徳学講義』『國民訓』『道徳教育講義』『自識録』のほか、数多くの翻訳や手稿が残されている。

西村は、明治三十五年（一九〇二）に逝去。辞世の言葉は、「我れ百年の後に知己を俟つ、敢て今日達せざるを慨かず」であったと伝えられている。

処で、西村の没後百余年を閲みした今日、国の内外で西村の名前を知る人の数はさわめて少い。同時代に活躍した福沢諭吉と比較してみても、福沢が日常生活においてはほとんどなじみがない。一般によく知られているのに対して、西村の名前は日常生活においてはほとんどなじみがない。試みに現在高等学校において使用されている教科書を繙いてみても、福沢諭吉の名前は日本史や公民科倫理において必ず登場し、その思想も可成り詳細に紹介されているのに対して、西村茂樹の方は、日本史では明六社の一員として名前だけが紹介されているに過ぎず、僅かに公民科倫理の教科書において、簡単に思想内容に触れたものがみられるだけである。甚しい場合には、西村の名前が一切登場しない公民科倫理の教科書すらある。

一方、出版界の現況はどうか。たとえば、中央公論社発行の『日本の名著』（中公パックス）全五十巻の中には、明六社で活躍した思想家の中で、福沢諭吉、西周、加藤弘之等の著作は取り入れられているが、西村茂樹の著作は一切取り入れられていない。また、西村の著者ともいふべき『日本道徳論』も、かつては岩波文庫の中に収録されていたが、なぜか現在では姿を消している。

こうした状況の中で、奇しくも西村茂樹没後百年目に当たる平成十四年（二〇〇二）の春、ドイツにおいて一冊の書物が出版された。

森有礼における国民的主体の創出

長谷川精一著

森有礼の言説や行ってきた政策の目的が日本国民の主体の形成にあったことを、さまざまな角度から論証する。

▶A5判・466頁／定価9,450円 ISBN978-4-7842-1367-2

明治前期の教育・教化・仏教

谷川 穰 著

学校教育制度の定着過程で、宗教は教育といかなる関わりを持ったのか。その重層性・複雑性を浮き彫りにする。

▶A5判・372頁／定価6,090円 ISBN978-4-7842-1386-3

三高の見果てぬ夢

巖 平 著 中等・高等教育成立過程と折田彦市

1880～1890年代の中等・高等教育の成立過程を、第三高等中学校およびその前身校の変遷に即して明らかにする。

▶A5判・352頁／定価7,875円 ISBN978-4-7842-1399-3

武士の精神とその歩み 最新刊

A・ベネット著 武士道の社会思想史的考察

文化人類学者のクリフォード・ギアツによる宗教の定義を援用し、各時代における武士の精神を精査する。

▶A5判・298頁／定価5,040円 ISBN978-4-7842-1426-6

増補 郷土教育運動の研究

伊藤純郎著

1930年代に展開された郷土教育運動の歴史的意義を実証的に解明する。長らく品切れだった旧版に1章を加えて再版。

▶A5判・506頁／定価10,290円 ISBN978-4-7842-1402-0

「封建」・「郡県」再考

張翔・園田英弘編 東アジア社会体制論の深層

伝統的大概念を多角的に検討し、その論理的枠組や時代的要請による理論的發展の構造を解明しようとする13篇。

▶A5判・412頁／定価6,825円 ISBN4-7842-1310-4

史料探訪

36

「翁」「三番三」「千歳」

狩野永信筆

門脇幸恵

国立能楽堂調査資料係主任

能楽の歴史の解明は、世阿弥の伝書類の発見以来急速に進展し、文献資料研究は能楽研究の主流となっている。また、芸能は伝統を存続させるために時代とともに変化し続けており、そのかたちを窺い知るには、時々の演出に従いその形態を変化させてきた道具類も極めて重要な資料である。しかし、それらのほとんどは年記を持たず、歴史を遡るにはジャンルを跨ぐ資料の研究が不可欠となっている。その中で、当時の舞台の様子を描いた絵画資料は、最も写実的な演能記録のひとつと考えられる。芸能の歴史のほとんどは映像記録を持たない時代であり、そこに画家の意図が反映されているにせよ、歴史上の演能の様子を伝える絵画は、貴重な写実資料なのである。資料の蓄積は施設の歴史でもあり実績でもあるが、資料は求めて容易に得られるものではなく、さまざまな交流や情報の中からもたらされる。今回ご紹介する資料もその一つである。

狩野伊川院永信（1775～1828）の「翁」「三番三」「千歳」の三幅対である。落款は「伊川院法印栄信筆」。「翁」「三番三」「千歳」一幅ずつの画像に描かれたそれぞれが、賛に代えた詞章に自著／花押を添え、その詞章に呼応するそれぞれの型が極めて精緻に描かれている。「翁」は十五世宝生大夫弥五郎友于（1795?～1865）、「三番三」は二十世大蔵弥太郎虎文（1791～1834）。「千歳」は「宝生鈴次郎／十一歳書」とあり、颯爽とした千歳の舞が描かれ「君の千歳を経ん／ことも天津乙女の羽衣よ／なるは瀧の水／日は照るとも」と11歳とは思えないしっかりした筆跡で添えられている。落款も伊川院に間違いなく、おそらく、十四世英勝以来將軍指南役となっていた宝生流の大夫に近い幕閣の中樞にあった誰かが、御用絵師伊川院に描かせ、大夫らに賛を入れさせた作品であろうと考えられる。

では、いつ描かれたのであろうか。狩野伊川院永信は享和2年（1802）に28歳で法眼に、文化13年（1816）42歳で法印に叙されているから、それから亡くなる文政11年（1828）までの12年間の作品であることは間違いない。また、十五世弥五郎友于は、文化8年に宝生大夫となり、以来度々「翁」を勤めている。しかし、翁面を付けた舞姿のため、その相貌までは窺えない。一方「三番三」と「千歳」の表情には年齢の特徴も良く表わされている。「三番三」の二十世大蔵弥太郎虎文は、天保5年（1834）に42歳で亡くなるが、揉の段を澆刺と舞う若々しい姿が描かれており、おそらく20歳代～30歳代前半のものではないかと推測される。「千歳」の宝生鈴次郎は、厳肅な舞台に臨む緊張のためか、幼さの残る頬を紅潮させ、懸命に勤める初々しい画像である。11歳という彼の年齢から迎れば、この作品の制作時期を特定することはさほど難しい作業ではないはずであった。ところが、

ここからが難渋を極めた。彼を特定できる資料はほとんどなく、途中幾度となく挫折した。恩師表章先生のご教示により、ようやく辿り得た範囲をここに御紹介する。

まず宝生鈴次郎の特定であるが、『重修猿楽伝記』天保14年「宝生座分限帳」の「連」の項にある「宝生民次郎」の肩書に「養父鈴二郎」とあり、年代から見て、おそらくこの鈴二郎である可能性が高い。次に演能の時期だが、御用絵師の作品であるところから公式の演能記録『触流し御能組』にあたると、弥太郎虎文が弥五郎友于の「翁」に「三番三」を勤めたのは5回、それを他の資料と勘案し、鈴次郎が「千歳」を勤めた記録は見出せなかったが、「千歳」を勤めた役者名が記載されている演能を除くと、文政3年（1820）10月27日の「右大将（徳川家慶）疱瘡全快祝賀本丸能」か、文政5年3月13日の「將軍（家斉）父子夫妻転昇任祝賀能」3日目の「翁」。もしくは、文政8年4月5日の「徳川家慶嫡子正之助（家定）名弘め祝賀能」2日目の「翁」の3回となる。

鈴次郎は翌年の文政9年の江戸城本丸奥能でも、弥五郎友于の「望月」に子方を勤めている。しかし翌年の江戸城將軍父子昇進祝賀能3日目では、すでに友于の「難波」のツレを勤める年齢に達していた。よって、文政3年か5年の演能の可能性が高いと考えられるのである。



三番三



翁



千歳

鈴次郎に関しては、その出自もまたツレ役となった経緯も明らかではないし、文政11年以降の記録もない。宝生座を挙げての興行であった弘化5年（1848）の勸進能の記録にも、その名を見出すことはできないため、健康上の理由か早逝した可能性も考えられる。先学のご教示を賜ればありがたい。

能の歴史には、まだまだ解明されない部分が多い。しかし、この作品が江戸城北丸舞台での演能を描いたもので、鈴次郎が十五世宝生大夫友于の「翁」に「千歳」を勤めたのであれば、宝生座における彼の存在を考える一つの手掛かりとなるのではないだろうか。この作品を通して歴史の中に隠れていた一人の能役者の存在が浮かび上がったことは事実である。

今回、美術史的考察に関しては河合正朝、榊原悟、樋口一貴の各氏に御教示を頂いた。また、この資料とのご縁を下さった小池富雄氏にも、この場を借りて感謝申し上げます。そして、浅学を御教導下さった師の学恩に深謝申し上げます。

国立能楽堂は開場25周年を迎えたが、開場以来収集してきた資料は多岐に亘る。しかし、個々の作品の研究はようやくはじめられたところである。収蔵資料が能楽関係者のみならず、今後多くの方々の研究に役立てていただけることを願っている。

—MEMO—

国立能楽堂

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1
tel 03-3424-1331
<http://www.ntj.jac.go.jp/nou/>

国立能楽堂コレクション展——能の雅 狂言の妙——
7月11日（土）～7月26日（日）名古屋松坂屋美術館
本作品を含む約150点を公開。

がんざんだい し みくじほん

元三大師御籤本の研究

おみくじを読み解く

大野 出 著

【最新刊】

本書はおみくじに関する初めての研究書。おみくじの源流を探っていくと、必ずたどり着くのが元三大師御籤。実は現代のおみくじも多くは元三大師御籤本に由来している。江戸時代のそれらの史料群を時系列に従って比較、分析することによって、ようやく見えてきた近世日本人の心のうち。

江戸時代、おみくじはさまざまな信仰対象と結びついていく。たとえば観音、八幡。あるいは七福神。ところが、それら以上に人々の信仰を集めていた意外なものがあった。それは「天道」。すなわち「お天道様(おてんとうさま)」。これは、おみくじが武士に由来する占いであったことも深く関係している。巻末に索引を附す。

◆内容目次◆

研究対象としての「おみくじ」、その諸相と概観／研究史考／元三大師御籤本の分節点と類別／元三大師御籤本の思想史的展開／元三大師御籤本における倫理的処世訓と現世的願望／元三大師御籤本の受容層に関する一つの仮説



▶A5判・200頁／定価3,570円 ISBN978-4-7842-1454-9

祈りの文化

大津絵模様・絵馬模様

信多純一著

【4月刊】

江戸時代から明治・大正そして現在まで、近江大津道分にて作られ、手軽な土産として全国津々浦々の人々に愛された民画・大津絵。その多彩に綾なす信仰、祈り、教訓、そして遊びの画題は、多くの人々の想念の数々を端的に映し出すものである——その起源・絵馬との共通点・画題の意味など新考察を加え、多くの図版をあげて解説した全大津絵の事典。

◆内容目次◆

大津絵(大津絵起源をめぐって／大津絵始祖浮世又平説／私と大津絵／柳宗悦の大津絵研究／大津絵古文獻)／藤娘のルーツ(人形・舞踊で知られる藤娘／会津葉師堂の藤娘絵馬／絵馬と大津絵とをつなぐもの／大原神社芸能絵馬との出会／藤娘の淵源は愛宕参り)／絵馬／大津絵の種類(祈りの大津絵画／信仰年中行事と大津絵／神像・福神・高僧の大津絵／鳥獣類の大津絵／諺題の大津絵)／大津絵の時世粧(京都の役者絵馬／絵馬から大津絵／男女の風俗図)／飾る時空／大津絵偷染／大津絵の文化相



しのだ・じゅんいち…大阪大学名誉教授。文学博士。著書に『近松の世界』『にせ物語絵』『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』『浄瑠璃御前物語の研究』など。

▶B5判・170頁／定価3,675円 ISBN978-4-7842-1425-9

日光東照宮の成立

近世日光山の「荘厳」と祭祀・組織

山澤 学 著

【最新刊】

近世日光山は、徳川家康が東照大権現として勧請された東照宮が鎮座し、徳川将軍家および幕府の崇敬の地となった。本書はその成立過程を、東照宮を支えた将軍ないし天皇を頂点とした力学、神格を再生産すべく構築された祭祀組織と祭礼の特質、権現造建築に示される建築・空間を規定した同時代社会、さらにその裾野に広がる町の形成、これら全体を構造的に把握することにより明らかにする。

◆内容目次◆

日光東照宮祭祀の存立原理／近世日光山惣山組織と法会の編成／日光東照宮建築の系譜／日光惣町における御役の編成



やまさわ・まなぶ…1970年栃木県生。筑波大学第一学群人文学類卒業。同大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻単位取得満期退学。博士(文学)。現在筑波大学大学院人文社会科学部研究科講師。

▶A5判・380頁／定価5,985円 ISBN978-4-7842-1452-5

口頭伝承と文字文化

文字の民俗学 声の歴史学

笹原亮二編

フィールドワークによる生の資料と、文字で伝えられた資料両者の扱いかたに着目し、新たな研究方法について論じた意欲作。国立民族学博物館で行われた共同研究の成果。

▶A5判・444頁／定価7,350円 ISBN978-4-7842-1447-1

生命論と霊性文化 仏教への問い

佛教大学国際学術研究叢書①

【最新刊】

第20回国際仏教文化学術会議実行委員会編

2007年10月13日に佛教大学(京都市)にて開催された「第20回国際仏教文化学術会議」の基調講演(東京大学島藺進氏ほか)および研究発表を修正・加筆し、研究成果として刊行。

▶A5判・208頁／定価2,100円 ISBN978-4-7842-1449-5

棟札の研究

水藤 真 著

寺院の殿堂や神社などの上棟式・大修理・屋根替のさいに、建物名・願主・工匠名・上棟年月日などを記して棟木に打ち付けた板を棟札という。本書は、国立歴史民俗博物館が行った棟札調査報告書をもとに、定義・概要・書式の考察から棟札の意味・価値など多方面から検討を加え、研究の整理と方向性を示した一書。

▶A5判・230頁／定価3,990円 ISBN4-7842-1243-4

熊本藩の地域社会と行政

近代社会形成の起点

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編

【最新刊】

永青文庫細川家文書に大量に残された地方行政記録綴「覚帳」や、村役人層をはじめとする住民の評価・褒賞記録綴「町在」の系統的分析を行うことで、19世紀段階の近世行政システムの全容を解明し、さらにそれらが近代社会の成立や地域の近代化にとって、どのような前提条件を提供することになったのかを明らかにする。近世地域社会論の成果と課題を踏まえて、西国大藩としての熊本藩領内の地域社会像を描き出す意欲的論集。

◆内容目次◆

- | | |
|--|---------------------|
| 第1章 熊本藩政の成立と地域社会—初期手永地域社会論— | 稲葉継陽 (熊本大学准教授) |
| 第2章 城下町の土地台帳にみる都市運営の特質 | 松崎範子 (熊本大学研究生) |
| 第3章 海辺干拓地における村の組成—肥後国宇土郡亀崎新地亀尾村の事例— | 内山幹生 (熊本大学研究員) |
| 第4章 日本近世における評価・褒賞システムと社会諸階層
—一九世紀熊本藩住民評価・褒賞記録「町在」の成立・編成と特質— | 吉村豊雄 (熊本大学教授) |
| 第5章 幕末維新时期熊本藩における軍制改革と惣庄屋 | 木山貴満 (熊本県地域振興部嘱託員) |
| 第6章 幕末維新时期熊本藩の「在地合議体制」と政策形成 | 三澤 純 (熊本大学准教授) |
| 第7章 明治初年の藩政改革と地域社会運営の変容—藩から県への「民政」の転回— | 上野平真希 (熊本大学研究員) |
| 第8章 近世地方役人から近代区町村吏へ—地方行政スタッフの明治維新— | 今村直樹 (日本学術振興会特別研究員) |

▶A5判・424頁／定価9,450円

ISBN978-4-7842-1458-7

畿内の豪農経営と地域社会

渡辺尚志編

河内国家農の岡田家文書を多角的に分析し、畿内における村落と豪農の特質を経済・社会構造の観点から解明する。

▶A5判・508頁／定価8,190円 ISBN978-4-7842-1385-6

中世・近世の村と地域社会

西村幸信著

大和を中心とした中世・近世の村落構造に関する諸論考を集成。解説：仁木宏・村井良介・谷山正道

▶A5判・404頁／定価6,510円 ISBN978-4-7842-1353-5

近世社会と百姓成立 構造論的研究

渡邊忠司著

佛教大学研究叢書 1

領主権力による「成立」構造を再検証し、百姓の観点から百姓自らが創出した「成立」条件と構造を解明。

▶A5判・310頁／定価6,825円 ISBN978-4-7842-1340-5

近世吉野林業史

谷彌兵衛著

吉野林業を初めて通史的にとりあげ、その光と影を、史料に基づいて実証的に明らかにする。

▶A5判・538頁／定価9,765円 ISBN978-4-7842-1384-9

徳川将軍家領知宛行制の研究

藤井讓治著

思文閣史学叢書

領知朱印状に注目し、徳川将軍家の領知宛行制の形成過程とその特質を解明。各巻末に領知朱印状の一覧を付す。

▶A5判・412頁／定価7,875円 ISBN978-4-7842-1431-0

近世御用絵師の史的研究

幕藩制社会における絵師の身分と序列

武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編

論考6篇、禁裏御用絵師の身分を探る史料翻刻3篇収録。

▶A5判・458頁／定価7,875円 ISBN978-4-7842-1392-4

日本近世地誌編纂史研究

白井哲哉著

思文閣史学叢書

編纂という文化的行為の側面から地誌を理解し、東アジア地域の歴史認識・地理認識を全体的に考察する可能性を拓く一書。

▶A5判・386頁／定価9,660円 ISBN4-7842-1180-2

近世地域教育史の研究

木村政伸著

近世農村社会に存在した多様な内容・水準を持つ教育の構造と、その構造がいかなる社会的背景、過程を経て変容していったのかを明らかにする。

▶A5判・290頁／定価5,985円 ISBN4-7842-1274-4

明治維新期の政治文化

佐々木克編

京大人文研の共同研究「明治維新期の社会と情報」の研究成果。明治維新期の諸問題にアプローチを試みた一書。

▶A5判・390頁／定価5,670円 ISBN4-7842-1262-0

京都雑色記録【全3巻・既刊2冊】

朝尾直弘編

京都大学史料叢書 7・8

上雑色五十嵐氏諸記録と下雑色小島氏留書(日記)を収録

▶A5判・平均400頁／定価(各)14,700円 ISBN4-7842-1133-0 / -1135-7

熊本大学拠点形成研究

「世界的文化資源集積と文化資源科学の構築」

熊本大学文学部准教授

三澤 純

熊本大学拠点形成研究事業は、本学に世界水準の研究拠点を構築するという観点から創設された学内共同研究制度であり、COEやグローバルCOEに採択された研究を「拠点A」、今後、これらを目指す研究を「拠点B」として、研究支援を行っている。私たちの「世界的文化資源集積と文化資源科学の構築」班（以下、「本研究班」とする）は、二〇〇三年度に人文社会科学系の「拠点B」に採択されて以降、科学研究費補助金等の外部資金も獲得しながら共同研究を積み重ね、これまで木下尚子他編『東アジアの文化構造と日本の展開』（二〇〇八年、北九州中国書店）、吉村豊雄他編『熊本藩の地域社会と行政』（二〇〇九年、思文閣出版）、『一九世紀熊本藩住民評価・褒賞記録「町在」解析目録』（二〇〇九年、熊本大学附属図書館）を上梓してきた。本研究班内には、歴史学、考古学、文学・民俗学という三つのグループがあるが、ここでは主に歴史学グループの活動について紹介したい。



熊本大学附属図書館貴重資料室における永青文庫細川家文書の架蔵状況

本研究班は、本学が前身校（旧制第五高等学校等）以来、集積してきた膨大な古文書や考古・文学・民俗資料を有機的に関連させて分析し、社会の団体的編成を基本的特質とする「伝統日本社会」の仕組みを明らかにすることを共通目的として発足した。このうち、古文書について言えば、本学附属図書館は、近世大名家文書の代表格として広く知られている

「永青文庫細川家文書」（寄託）や国指定重要文化財「阿蘇家文書」をはじめとして、熊本藩世襲家老の「松井家文書」「有吉家文書」、藩内各地の庄屋文書等の地方文書を数多く保有している。加えて、文学部日本史研究室が、長年にわたって、惣庄屋文書（「古閑家文書」「多田隈家文書」等）や明治以降の役場文書（「阿蘇郡小国町役場文書」）の撮影を行ってきたこともあり、領域としてはほぼ旧熊本藩内に限られるものの、中世から近代にかけて、「伝統日本社会」が形成・確立・発展・崩壊する各段階を、一貫して詳細に分析することができる史料的环境が整っている。

前掲の『熊本藩の地域社会と行政』は、そうした史料群をフル活用して、熊本藩領内の地域社会のありようを、同藩の重層的行政システムとの関係で論じたものである。本書を編む際、私たちが特に意識したことは、「伝統日本社会」の特徴を、第一に中近世移行期から国民国家形成期までを見通す中で描こうとしたこと、第二に問題を常に東アジア史の枠組みの中で捉えて叙述しようとしたことである。特に第二の点は、本学の中国史スタッフとの議論がなければ獲得できなかった視点であり、改めて共同研究のメリットを確認することができた。こうした成果を受けて、今春、文学部附属「永青文庫研究センター」が設立される。これは肥後銀行・熊本県・財団法人永青文庫の全面協力の下、永青文庫資料の学術研究の促進と研究成果の社会還元を目指す施設である。また秋には、「町在」解析情報の検索システムをインターネット上で公開する計画も進行中である。私たちが六年前に蒔いた小さな種が、戦前以来の肥沃な土壌の上で、今、大きく育とうとしているシーンに立ち会うことができ、感慨もひとしおである。

二〇〇八年は源氏物語千年紀で全国が沸いた。この件で私が相談を受けたのは二年余り前に遡り、委員会設置後は企画部員として活動のお手伝いをするようになった。

二〇〇六年十一月一日、八名の「よびかけ人」が、東京と京都で記者発表し、この日を「古典の日」と定め、源氏物語千年紀に向けて、国や関係する行政、寺社、研究者らに広く呼び掛けを行った。これを受けて京都市・宇治市・越前市など『源氏物語』とゆかりの深い行政、事業団体からなる委員会が組織され、「紫のゆかり、ふたたび二〇〇八」をキャッチフレーズに千年紀事業の具体化に向けて動き出した。そして一年後の二〇〇七年十一月一日には京都会館でイベントが催され、金剛永謹氏の舞囃子「源氏供養」を皮切りに主催者挨拶に続き、「源氏物語と私」と題したドナルド・キーン氏の記念講演などがあり、関係者と一般公募の聴衆でホールは満席、千年紀の展開への弾みとなった。

二〇〇八年の年明けから源氏一色といつてよいほどに博物館・美術館をはじめ各施設における特別展示、行事が目白押しとなり、恒例の「都をどり」や平安神宮の「薪能」の演目もすべて源氏づくめであった。いっぽう地味ではあるが、藤壺・弘徽殿・桐壺など『源氏物語』ゆかりの地に説明板が設置され、また紫式部も中宮彰子のお供で一時期を過ごし、『源氏物語』出現の原動力となった藤原道長の土御門殿跡にも説明板が建てられたことは千

源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第七回〉

源氏物語千年紀を終わって



隴谷 壽

(同志社女子大学名誉教授)

年紀事業として大きな意味をもった。

そして迎えた二〇〇八年十一月一日、国立京都国際会館において記念式典が挙行された。記念講演の後、天皇皇后両陛下御臨席のもと「古典の日」の宣言が読み上げられた。その中で述べている古典の定義は、これから毎年行われる「古典の日」に向けての指針となろう。

古典とは何か。風土と歴史に根ざしながら、時と所をこえて広く享受されるもの。人間の叡知の結晶であり、人間性洞察の力とその表現の美しさによって、私たちの想いを深くし、心を豊かにしてくれるもの。いまでも私たちの魂をゆさぶり、「人間とは何か、生きるとは何か」との永遠の問いに立ち返らせてくれるもの。それが古典である。揺れ動く世界のうちにあるからこそ、私たちは、いま古典を学び、これをしっかりと心に抱き、これを私たちのよりどころとして、世界の人々とさらに深く心を通わせよう。

翌日から数日にわたって行われた海外の研究者を交えての源氏物語国際フォーラムは盛り多いものとなった。なお、二〇〇八年度の文化勲章受章者に『源氏物語』と関わりの深いドナルド・キーン氏と田辺聖子氏を選ばれたことは特記されてよい。二年前には瀬戸内寂聴氏が受章されている。今後、古典の日には上記に掲示された宣言の原点に立ち返り、千年紀を契機として芽生えた古典への歩みが継続し、深められることを願うものである。

禁裏・公家文庫研究

田島 公編

勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズ。

第三輯

【4月刊行予定】

序——書陵部の想い出—— 飯倉晴武(元奥羽大学)

第一部

近代の禁裏・公家文庫 飯倉晴武
伏見宮本の変遷 飯倉晴武
『後円融院宸記』永徳元年・二年・四年記
桃崎有一郎(日本学術振興会特別研究員)

後光明天皇期における禁裏文庫
松澤克行(東京大学史料編纂所)
京都大学附属図書館所蔵『芥記』 松澤克行
近世禁裏における六国史の書写とその伝来
小倉真紀子(日本学術振興会特別研究員)

第二部

九条家本『神今食次第』にみえる「清涼御記」逸文
西本昌弘(関西大学)
『執政所抄』の成立と伝来について
渡辺滋(日本学術振興会特別研究員)

承安三年最勝光院供養に関する史料
藤原重雄(東京大学史料編纂所)
御賀の故実継承と「青海波小輪」について
三島暁子(東京大学史料編纂所)

「公卿学系譜」の研究 田島公(東京大学史料編纂所)
第三部
宮内庁書陵部所蔵伏見宮本目録
小倉慈司編(宮内庁書陵部)

東山御文庫本マイクロフィルム内容目録(稿) 索引
小倉慈司編
▶B5判・490頁/定価12,390円 ISBN978-4-7842-1414-3

第二輯

第一部 東山御文庫架蔵「地下文書」の性格/書陵部所蔵宋版一切経の来歴について、その印造から現代まで/中世天皇家の文庫・宝蔵の変遷/高松宮家旧蔵『伏見殿文庫記録目録』について

第二部 渤海南京南海府の位置推定についての考察/九条本『官奏抄』の基礎的考察/東山御文庫本『除目部類記』所引『法性寺殿御記』『中右記』逸文/『中右記部類』年次目録/高松宮家旧蔵『定能御記 安元御賀記』/宮内庁書陵部蔵『叙位儀次第』/紙背文書について

第三部 東山御文庫本マイクロフィルム内容目録(稿) 2
▶B5判・400頁/定価10,290円 ISBN978-4-7842-1293-0

第一輯

第一部 明治以後における東山御文庫御物の来歴/近世禁裏文庫の変遷と蔵書目録

第二部 田中教忠旧蔵『寛平二年三月記』について/『小野宮年中行事裏書』(田中教忠旧蔵『寛平二年三月記』)影印/翻刻/広橋家旧蔵本『叙除拾要』について/尊経閣文庫本『無題号記録』と東山御文庫本『叙位記中外記』所引『院御書』/『秋玉秘抄』と『除目秘抄』

第三部 東山御文庫本『御産記寛弘六年十一月』(小右記)の紹介/『中右記部類』目録/伏見宮本『御産部類記』について/『実躬御記』写本の形成と公家文庫/菊亭家本の賀茂(鴨)御幸記二種/洞院公教の出家

第四部 東山御文庫本マイクロフィルム内容目録(稿) 1
▶B5判・400頁/定価10,290円 ISBN4-7842-1143-8

中世史科学叢論

最新刊

藤本孝一著

平安博物館・京都文化博物館を経て文化庁主任文化財調査官を務め、永年史料学の現場で調査・研究に携わってきた著者が、40年の研究成果をまとめた一書。

第一篇 政治の変革と社会

藤原伊周呪詛事件について/寛徳荘園整理令序説/延久荘園整理令に関する学説批判/治暦四年における後三条天皇と藤原頼通 ほか

第二篇 平安京の変容と宇治

都城拡大論と『山槐記』/平安京の制宅法/平安京周辺の別業/平安京の名所・天橋立邸/山城国宇治郡と久世郡境界考 ほか

第三篇 王朝文化と貴族生活

公家の家名と家業/内親王名の附け方と読み方/裏松固禪編『院宮及私第図』(清書本)二巻/藤原定家・一条京極邸と『院宮及私第図』の復元 ほか

第四篇 史科学の諸相

暦年数換算法と藤原定家/新出・承和三年附山城国葛野郡高田郷長解小考/東洋文庫蔵『本朝文粹』巻二断簡/近衛基通公墓と観音寺蔵絵図との関連について ほか

第五篇 古記録学と典籍の伝来

頒曆と日記/古記録学小考/貴族日記の姿/古鈔本『範国記』『知信記』/家記と部類記/『出雲国風土記』浄阿書写説に関する疑問 ほか

◆内容目次◆

ふじもと・こういち…昭和20年生まれ。法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士課程単位取得中退。前文化庁主任文化財調査官。現在、龍谷大学文学部客員教授。

▶A5判・438頁/定価9,450円 ISBN978-4-7842-1455-6

御堂関白記全註釈 長和五年

最新刊

山中裕編
平安時代を代表する一級史料、藤原道長の日記「御堂関白記」。永年にわたる講読会(東京・京都)と夏に行われていた集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。待望の第2期、第7巻。

【第二期 全巻構成】

第1回配本	長和4年	定価6,300円	ISBN4-7842-1158-6
第2回配本	寛弘3年	定価5,775円	ISBN4-7842-1214-0
第3回配本	寛弘7年	定価5,775円	ISBN4-7842-1260-4
第4回配本	寛弘4年	定価5,775円	ISBN4-7842-1302-3
第5回配本	寛弘8年	定価6,825円	ISBN978-4-7842-1350-4
第6回配本	寛弘5年	定価5,250円	ISBN978-4-7842-1374-0
第7回配本	長和5年	定価12,075円	ISBN978-4-7842-1434-1
第8回配本	長徳4年~長保2年	未刊	

やまなか・ゆたか…大正10年生まれ。東京大学史料編纂所教授。関東学院大学文学部教授。調布学園女子短期大学教授等を歴任。文学博士。

撰関時代文化史研究

関口力著 【思文閣史学叢書】

「如帝王」と評された藤原道長の時代を中心に取り上げ、リアルタイムに日々の出来事が記される古記録・日記類をもとに、撰関時代全盛期に生きた人物、および彼らをはぐくんできた社会について考察。政権を掌握した体制派、それに対する反体制派、そしてそうした官人集団とは一線を画した非体制派の人物群という基本的な人間類型を示すことにより、あくまで人間が主人公である歴史の在り方について追究する。

▶A5判・488頁/定価9,450円 ISBN978-4-7842-1344-3

日本古代都市史研究

—古代王権の展開と変容—

堀内明博著

【最新刊】

永年、平安京などの都市遺跡発掘調査に携わった著者の研究成果。長岡京の東宮と左京東院、平安京の条坊と市・町の形態、宅地と建物配置などの王朝都市から、白河・鳥羽殿、源氏・平氏の館などの中世前期都市まで、都城の展開と変容過程を時系列的に分析し、古代王権のあり方を考古学の成果を踏まえて解明した一書。掲載図版多数。

◆◆内容目次◆◆

第1篇 古代都城研究序説

日本都市史研究の中の都城制研究史

第1部 長岡京

研究史／東宮と左京東院／長岡京出土の特殊建物遺構／特殊建物遺構と調邸／長岡京後期造営についての再検討

第2部 平安京

研究史／平安京の内部構造／平安京右京六条三坊／弘仁期前後の平安京／平安京における宅地と建物配置／平安京・京都における市・町の形態と展開／古代都城における内裏地割

ほりうち・あきひろ…1951年生、芝浦工業大学工学部建築学科卒。(財)京都市埋蔵文化財研究所主任、(財)古代学協会・古代学研究所教授を経て、現在、京都府立大学文学部特任教授。

▶B5判・514頁／定価15,750円

第2篇 中世前期都市研究

中世前期都市研究

第1部 変容する街区

白河街区における地割とその歴史的変遷／鳥羽殿の研究史と現状／鳥羽殿の成立と展開

第2部 中世都市への変貌

武士の館／発掘された源氏・平氏の館／嵯峨野地域の地割について／七条町の成立とその宅地割／王朝都市から中世都市へ
図表一覧／索引(遺跡・地名、文書名、人名)

ISBN978-4-7842-1457-0

正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編

美術史・仏教・建築・歴史の第一線の研究者による3回(2005~2007)のシンポジウムの成果。口絵8頁。

▶四六判・430頁／定価3,150円 ISBN978-4-7842-1439-6

正倉院展六十回のあゆみ

奈良国立博物館 編集・発行

正倉院展の歩みを、主な出陳宝物の図版や特徴・エピソード・出陳一覧などのデータと研究者のエッセイでたどる。

▶A4判・286頁／定価3,150円 ISBN978-4-7842-1440-2

翁の生成 渡来文化と中世の神々

金賢旭著

中世の翁信仰の生成過程を諸縁起や史料から読みとることで、中世の日韓文化交流の新たな相貌を表出。口絵4頁。

▶A5判・246頁／定価5,250円 ISBN978-4-7842-1411-2

続々日本仏教美術史研究

中野玄三著

仏教美術史研究三部作の最新刊。50年に及ぶ中野美術史学の集大成。口絵8頁。

▶A5判・812頁／定価17,850円 ISBN978-4-7842-1415-0

埴仏の来た道 白鳳期仏教受容の様相

後藤宗俊著

埴仏とは粘土で作られた小さな仏像。インドから長安・飛鳥を経て豊前虚空蔵寺に招来された道をたどる。

▶A5判・320頁／定価5,985円 ISBN978-4-7842-1433-4

経筒が語る中世の世界

別府大学文化財研究所企画シリーズ①

小田富士雄・平尾良光・飯沼賢司編

別府大学文化財研究所主催のセミナーをまとめた論集。

▶B5判・236頁／定価5,040円 ISBN978-4-7842-1409-9

日本古代の伝承と歴史

渡里恒信著

大化前代における王権と氏族の諸様相を『古事記』『日本書紀』などの伝承史料から解き明かした論考と、平安初期の特徴的な君臣関係をテーマとした考察を収める。

▶A5判・372頁／定価6,300円 ISBN978-4-7842-1403-7

蓬萊山と扶桑樹 日本文化の古層の探究

岡本健一著

不老長生の仙境「蓬萊山」と生命更新の仙木「扶桑樹」は古墳時代を解き明かす上でのキーワードである。「前方後円墳＝蓬萊山起源」説を提唱してきた著者の研究集大成。

▶A5判・442頁／定価5,775円 ISBN978-4-7842-1400-6

王権と都市

今谷明編

日文研共同研究「王権と都市に関する比較史的研究」の成果。日本・アジア・欧州3領域から11篇の論文を収録。

▶A5判・372頁／定価7,140円 ISBN978-4-7842-1396-2

大地へのまなざし 歴史地理学の散歩道

金田章裕著

古代日本の条里制から世界地図まで、歴史地理学の面白さを紹介するとともに、グローバルな研究の諸論稿を集成。

▶A5判・316頁／定価4,725円 ISBN978-4-7842-1405-1

藤村庸軒年譜考 [全2冊]

白寄顕成著

4月刊行

藤村庸軒（1613-1699）は、儒者・儒学者であり、漢学・和学にわたる広い教養と、卓越した美的センスにより、漢詩・和歌・作庭・花道・茶具の製作に才能を発揮した。多くの文人墨客との交わりをその詩集に書き残している。また、創意工夫による独自の茶の技を展開し、道としての解脱に至り、庸軒流茶道を完成させた。本書は、庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづき歳ごとに明かした異色の年譜考。茶道を軸とした近世文化史の魅力を余すところなく伝える一書。

しらすき・けんじょう…1941年京都・顕峯院に生。京都大学大学院文学研究科修士課程（宗教学仏教学専攻）修了。密教図像学会常任委員。京都花蓮研究会会長。神戸女子大学教授。

▶A5判・総1,800頁／定価36,750円（分売不可）

ISBN978-4-7842-1456-3

茶の医薬史

—中国と日本—

岩間眞知子著

もともと茶は薬であった。日本や中国の歴代医薬書の中には茶の記事があり、そこには茶の効能や処方のほか異名・産地・製法も記され、古辞書や『茶経』『茶譜』など茶書の抜粋も収録されており、非常に貴重な史料である。本書は、中国と日本の医薬書史料の影印を多数収録し、それらの史料から中国・日本の各時代における茶の様相とその歴史の変遷を明らかにする。

【内容目次】

第一章 茶の医薬史：中国編

隋代までの医薬書／唐代の医薬書／宋代の医薬書／金・元代の医薬書／明代の医薬書／清代の医薬書

第二章 茶の医薬史：日本編

平安時代までの医薬書／鎌倉時代の医薬書／室町・安土桃山時代の医薬書／江戸時代の医薬書（前期・中期・後期）

第三章 茶の医薬史：論考編

茶を記した現存最古の薬書史料／『神農本草経』の茶について／蠟（臘）茶について／養生論の系譜から見た『喫茶養生記』／寒の茶・温の茶

第四章 医薬書史料

中国編／日本編（中国・日本の医薬書21点の、解説・茶関係部分の翻刻・訳、一部は影印もあり）

いわま・まちこ…早稲田大学文学研究科（美術史）修士課程修了。

▶A5判・520頁／定価9,450円 ISBN978-4-7842-1463-1



蘭室藤村正員年譜考

白寄顕成著

庸軒流茶道の祖、藤村庸軒の三男藤村正員（1650～1733）の事跡について、自著『蘭室草』の収録作品（漢詩・和歌など）にそいながら、生涯の動向を歳ごとに明かした異色の年譜考。漢詩にみられる父庸軒ほか一族との交流や、広汎な諸資料にもとづいた京坂の茶人・文人たちとの交わりは、茶道を軸とした近世文化史の一側面を伝える趣きを備えた一書。

▶A5判・480頁／定価6,090円

ISBN4-7842-1173-X

江戸期文化人の死因

杉浦守邦著

日記、書簡、肖像画など、さまざまな資料から22名の死因を読み解き、「死因」という観点から、江戸期に活躍した文化人たちの生活を浮き彫りにする意欲作。

▶A5判・340頁／定価2,625円 ISBN978-4-7842-1422-8

近代茶道の歴史社会学

田中秀隆著

「伝統文化とは近代に自己変革に成功した文化である」との近代茶道史テーゼにもとづき、近代国家の文化的アイデンティティの生成構造面から、茶道が日本の「伝統文化」として認知されるようになった過程を考察する。

▶A5判・454頁／定価6,825円 ISBN978-4-7842-1377-1

公家茶道の研究

谷端昭夫著

近世における「公家茶道」を取り上げ、その独自の形態、実態と特徴、茶道史における位置づけを考察し、茶が持つ文化の内実を深める。

▶A5判・394頁／定価6,825円

ISBN4-7842-1265-5

医 譚

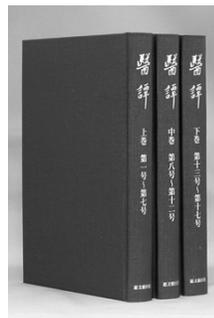
昭和13年(創刊号)～昭和19年(第17号) 復刻合本 全3巻

日本医史学会関西支部(杏林温故会)編

杏林温故会(現日本医史学界関西支部)の機関誌として創刊された『医譚』は、昭和13年2月に第1号が刊行され、昭和19年6月まで17号、そして戦後、昭和27年に復刊、今日復刊88号を数える。

入手困難で、医学史、科学史研究の貴重な古典として待望されていた、昭和19年刊行の17号までを限定出版。

上巻：創刊号(昭和13年2月)～第7号(昭和15年12月)
中巻：第8号(昭和16年3月)～第12号(昭和17年4月)
下巻：第13号(昭和17年8月)～第17号(昭和19年6月)



▶A5判・全3巻セット／定価25,200円

ISBN978-4-7842-1424-2

書評・紹介一覧 12～2月掲載分		※(評)…書評(紹)…紹介(記)…記事〔敬称略〕
日本産業技術史事典 (評)『史学雑誌』118編2号(中村尚史)	近代京都研究 (記)朝日新聞夕刊 12/18(今井邦彦)	
近世長崎・対外関係史料 (評)『史学雑誌』118編2号(木村直樹)	(記)京都新聞 2/5	
近代茶道の歴史社会学 (評)『日本歴史』729号(木塚久仁子)	日名子実三の世界 (紹)『月刊美術』12月号	
みやこの近代 (記)朝日新聞夕刊 12/18(今井邦彦)	近代工芸運動とデザイン史 (紹)『月刊書道界』12月号	
近世御用絵師の史的研究 (評)『史学雑誌』118編1号(長坂良宏)	(紹)『月刊美術』1月号	
一千年目の源氏物語 (紹)『PRESIDENT』2009.2.2号(新浪剛史)	(紹)『炎芸術』2009年春号	
	文学のなかの考古学 (紹)『古代文化』574号	
	翁の生成 (紹)中外日報 2/24	

12月から2月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	TRC	NPL	OPL	定価	発行月
住友史料叢書	23	23		1445-7 C3321	09002138	105851700	09691429	9,975	12
龍谷叢書	15	15	中世近世和歌文芸論集	1446-4 C3092	09002135	105849900	09691437	6,300	12
佛科大学国際学術研究叢書	1	1	生命論と霊性文化	1449-5 C1014	09013985		09864539	2,100	2

12月から2月にかけて刊行した図書

図書名	著者名	ISBN978-4-7842	TRC	NPL	OPL	定価	発行月
医譚 全3巻(第1号～第17号)	日本医史学会関西支部編	1424-2 C3047		105713700	09668591	25,200	12
江戸期文化人の死因(2刷)	杉浦守邦著	1422-8 C3021	08042442	0969335	09292905	2,625	12
翁の生成	金賢旭著	1411-2 C3014	09002132	105849300	09691445	5,250	12
続々日本仏教美術史研究	中野玄三著	1415-0 C3013	09002136	105852300	09691411	17,850	12
ディドロとルソー 言語と《時》	小宮彰著	1448-8 C3010	09006845	105989900	09779919	2,940	1
口頭伝承と文字文化	笹原亮二編	1447-1 C3039	09008190	106075600	09784349	7,350	1
安房妙本寺日我一代記(2刷)	佐藤博信著	1373-3 C3021	05037649	0651970	05801691	3,150	1
幸田露伴の世界	井波律子・井上章一共編	1444-0 C3091	09008193	106072500	09784356	5,250	1
日本古代都市史研究	堀内明博著	1457-0 C3021	09010620	106185100	09837709	15,750	2
光芒の大正	改造社関係資料研究会編	1459-4 C3021	09013999		09861956	5,250	2

(表示価格は税5%込)

法然上人800年大遠忌記念 法然上人絵伝集成シリーズ

浄土宗の宗祖・法然上人の生涯を描いた絵伝のうち、全巻揃って現存する四種すべてを、オールカラーの大型写真版で掲載。四大法然絵伝が持つ臨場感や風合いに触れることができる画期的企画。全巻の詞書を活字化、佛教学大学教授中井真孝氏による解説を付す。発行：浄土宗 製作・発売：思文閣出版

① 本朝祖師伝記絵詞（善導寺本）

▶A4判202頁／定価8,400円

② 法然上人伝絵詞（妙定院本）

▶A4判320頁／定価10,500円



続刊 ③ 拾遺古徳伝絵（常福寺本） 今春刊行
④ 法然上人行状絵図（知恩院本） 平成22年より刊行

本書は直販扱いです。書店様でのご注文はできませんのでご了承下さい

思文閣美術館ご案内

PLAIN PEOPLE アーミッシュの生き方

2009.5/2 sat.~8/2 sun. am.10-pm.5

休館日 月曜日(5月4日、7月20日は開館)・7月21日(火)



アメリカで、文明の利器を用いず、今も300年前の暮らしを貫く、プロテスタントの一派アーミッシュ。彼らのライフスタイルを紹介し、本当の幸せとは、進歩とはを問う。

【入館料】

一般：800(650)円
高大生：500(400)円
小中生：300(200)円
※()内は前売・団体料金
撮影・菅原千代志

【関連イベント】無料・但し入館料は別途必要(予約制 先着100名)

- 5/24(日) 14:00 「アーミッシュとは—彼らの信仰とライフスタイル」
講師：ドナルド・B・クレイビル (エリザベスタウンカレッジ教授・アーミッシュ研究家)
- 6/20(土) 14:00 「アーミッシュの服装—現代アメリカにおける古い伝統」
講師：ステファン・E・スコット (エリザベスタウンカレッジ再洗礼派・敬虔派ヤングセンター研究員)
- 7/12(日) 14:00 「アーミッシュという生き方」
講師：杉原利治 (岐阜大学教授 環境情報論) 大蔵千穂 (岐阜大学教授 生活経済学)

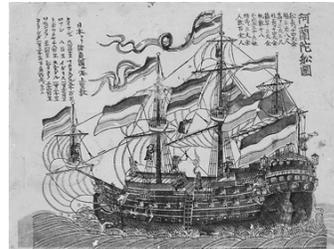
お問合せ

〒606-8203 京都市左京区田中関町2-7
TEL075-751-1777 FAX075-762-6262
<http://www.shibunkaku.co.jp/artm/>

思文閣出版古書部

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱い、目録販売を中心に営業しております。

※「思文閣古書資料目録」(年4回程度発行)をご希望の方は、古書部までお問い合わせ下さい。



初期長崎版画
阿蘭陀船図

一枚

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東元町357

☎(075)752-0005(代) Fax.(075)525-7155

URL <http://www.shibunkaku.co.jp/>

e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

刊行図書目録2009年版が出来ました!

ご希望の方は無料でお送りいたしますのでお申し付け下さい

▶ていーたいむ余録◀

幸田露伴は5、6才の頃すでに『十八史略』を読んでいたとかいいます。この21世紀にそんな幼稚園児がいたら神童どころか気持ち悪い。なにしろ今では大学のゼミで読むようなテキストです。もはや想像すらできませんが、明治の日本には現在とは比べものにならない漢学的教養が存在していたのです。露伴の作品にはわれわれが1世紀あまりの間に失ったものが詰まっています。『幸田露伴の世界』が、多くの方が露伴の世界と出会うきっかけになればと思います。(M)

▶表紙図版◀

大津絵 鬼に衣・大津絵 猫の三味線 (『追分絵』)
(『祈りの文化』より)

▶営業部より———誌面リニューアル計画中◀

ただいま「鴨東通信」の誌面リニューアルを検討しております。春夏秋冬と季刊で足かけ18年目を迎え、創刊時から部分的な変更はあったものの全面的な再検討は今までございませんでした。

まだまだ計画段階ではございますが、判型の変更であるとか、字の大きさ、情報量、段組などを含め、魅力的な誌面を目指し様々なことを検討しております。

詳細なリニューアル時期はまだ未定でございますが、充実した内容、手に取りやすく、読みやすい内容にしたいと存じますので、ご要望などございましたら、ぜひ、お寄せ頂きますと幸甚に存じます。(江)

株式会社 思文閣出版

〒606-8203 京都市左京区田中関町2-7 ☎075-751-1781(代) FAX.075-752-0723
<http://www.shibunkaku.co.jp/> e-mail: pub@shibunkaku.co.jp